

武蔵野市平和施策のあり方懇談会 (第3回)

日時：令和5年11月22日（水）午後7時～9時

場所：武蔵野市役所西棟8階813会議室

午後7時 開会

○座長

それでは、平和施策のあり方懇談会の第3回目を開催いたします。
議事に先立ちまして、事務局から資料の確認などをお願いいたします。

○事務局

それでは、配付資料の確認をさせていただきます。

まず、A4の次第が1枚ございます。

カラー刷りのアンケートの集計結果が資料1です。

参考としてアンケート確定版を資料2としてお配りしています。

資料3が本市の平和施策について、A4の裏表のものです。

最後に資料4、前回の第2回平和施策のあり方懇談会のプレストでの意見交換、委員の皆様にもメールでもお送りしましたが、そちらの一覧です。

それと、委員の皆様には、お手元に次回第4回懇談会の開催通知と、参考資料として平和アンケートの自由記載一覧をお配りしていますので、ご確認ください。

また、A委員からA3サイズで2枚、委員の皆様には資料があります。こちらをA委員から簡単にご説明をお願いしてもよろしいですか。

○A委員

本題からはちょっとずれてしまいますので手短かに。2種類ありまして、1つは、「武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会」の10月30日発行の会報の一部だけ抜き刷りしたものです。この委員会の中でもふれられていた、自由学園の「川田文子さんのこと」という本を渡辺えりさんという女優さんに送りました。渡辺さんのお父さんが中島の工員だったので、お友達を空襲で亡くされているんですね。そのお友達と川田文子さんという方は同じ場所で亡くなっていると、私は研究で推測をしているんですけども、そういう縁があったので、若い人たちが、高校生のときにこういうブックレットをつくっているの、メッセージをご感想と一緒にくださいとお願いし、原稿をいただけたので、その部分を抜き刷りしたものです。

もう一つは、これからやるイベントで、フィールドワークを12月に行うんですけども、その前に11月26日（日）に西東京市の芝久保公民館で座学を行います。これは西東京の題材なんですけれども、西東京市における空襲体験に関する取り組み、空襲体験を中

心とする戦争体験の取り組みはどのようなふうに取り上げられてきたかというのを歴史的に追いかけてみたら、あくまでも私案ですけれども、年代というか、時期によって扱われ方が違っていることが浮き彫りになった。参考になさっていただければと思います。

以上です。

○事務局

ありがとうございます。

資料に過不足等あれば、事務局まで教えていただければと思います。

以上になります。

○座長

それでは、本日の議題・報告に入ります。

前回も議論になったアンケートの結果を今日のご報告いただきますので、それも踏まえて、本日は次第の(2)の今後の方向性を考えるというところがメインとなります。それぞれの考えを存分にご発言いただきたいと思いますので、ぜひよろしく願いいたします。

それでは、議題・報告の(1)「中高生世代からの意見聴取について」、事務局よりご説明をお願いいたします。

○事務局

それでは、事務局から(1)についてご説明させていただきます。

カラー刷りの資料1をご参照ください。

なお、委員の皆様にはメールで資料を事前送付した後に事務局に届いた回答がありましたので、それも加えて回答者数が1名増えています。その点ご了承ください。

まず、調査対象についてですが、資料1の上の四角の囲みのところをご覧ください。

対象としまして、①中学生、②高校生(世代)、③過去の青少年平和交流派遣団の参加者。この方々を対象として11月上旬の2週間にアンケート調査を実施いたしました。

配付数は約2,200。回答は211名で、回収数としては9.6%でした。教育委員会にもご協力いただき、多くの中高生の皆様から回答いただけたものと思っています。ありがとうございました。

続きまして、下のカラーの円グラフが回答者の属性です。学年ですけれども、中学生が計114名。高校生が83名と、わりとバランスよく回答いただけたと考えております。

学校の種類につきましては、下に記載のとおりです。

次のページをお願いいたします。まず一番上、性別ですが、男女が約半々でした。

住所ですけれども、市外の方が 50%を超えていました。これは、武蔵野プレイスでも調査を行ったんですけれども、そのときに来ていた方がほとんどが市外の方。実感として 9割ぐらいだったと思うのですが、これが大きく影響していました。

次からが設問です。問1、「平和」についての関心の有無です。関心を持っている方が約7割といった結果になっています。

次のページをお願いいたします。関心を持っていないと回答した方に理由を聞いたものです。「平和について興味・関心を持つきっかけがない」、「忙しくて考えている暇がない」の2つが多かったです。

続きまして、問2、「平和」とはどのような状態だと思いますか、です。「戦争がない」、「安心して暮らせる」、「差別やいじめがない」。この順で回答が多かったです。

なお、この項目のみ、10の「未回答」の回答がかなり多くなっています。これは、紙での回収のほかにWEB回答もつくったんですけれども、WEB回答フォームに当初設定ミスがあったため、問2のときに選択できないといったことが途中で一定期間発生してしまいました。そのため、未回答37件のうち、33件がその期間の回答なしとなっております。こちらについて、お詫び申し上げます。

続きまして、問の3です。「戦争」と聞いたときに一番にイメージするものです。こちらもある程度想定はしていましたが、現在のイスラエルやパレスチナの情勢もありまして、5番の「世界で起こっている今の戦争や紛争」がかなり高くなっています。その次に「広島・長崎の原爆被害」が続いております。

次のページをお願いいたします。問4の戦争の様子について、だれ(何)を通じて聞いたことがあるか、です。4番のテレビ・新聞、2番の学校の先生、また5番、インターネット・SNSの順番で回答が多くなっています。また、3番の戦争体験者も思った以上に回答が多かったかなという印象を持っております。これは、竹内座長から、おそらく学校でのゲストティーチャーが入ってきて影響しているのではないかとといったご指摘をいただいております。

次の問5から問7までが武蔵野市関連の質問です。市外の回答者が先ほど申し上げたとおりかなり多かったこともありまして、この質問に限って、右下に四角の囲みで市外回答者を除いた回答も入れています。

問5が中島飛行機の認知度です。「はい」が約4割で、市民の方に限ると66%とかなり高くなっております。このあたりについても学校教育の影響があるのではと考えておりま

す。

問6は「武蔵野市平和の日」の認知度です。こちらは「はい」が14%で、市民の方に限ると26%でした。第1回でご報告した市民全体の市民意識調査の結果が約12%でしたので、中高生のほうが倍近く高くなっていると考えております。

次のページをお願いいたします。問7、井の頭自然文化園内の北村西望の『平和祈念像』の認知度です。「はい」が21%。市民の方に限ると31%でした。ここは想定より高かったと思っております。

続きまして、問8、戦争体験の伝承方法です。2番の戦争体験者のデジタル保存、また4番の学校で学ぶ、こちらが58%で同率の1位でした。次いで、7番の平和資料館、戦争遺跡等の見学に行くが続いています。

続きまして、問9、「平和」のために、あなたが大切だと思うこと、必要だと思うことです。こちらは、1番の戦争を体験した人の話を伝えていくこと、3番の現在の国際情勢を知る、学ぶこと、8番の様々な文化、習慣を持った人々と知り合い、理解すること、こちらがトップ3となっています。

次のページをお願いいたします。問10、どんな事業・イベントがあれば参加したいかということ聞いております。こちらは、1番が戦争遺跡の見学などのフィールドワーク、また、戦時中の食体験イベント、戦争体験者の話を聞く会、被爆地を訪問して戦争の実相を知る（青少年平和交流派遣団）の順番で高くなっています。やはり参加体験型のイベントの人气が高くなっていると考えております。

最後に、問11からが現在市が実施している平和関連事業の認知度と実際の参加の有無を聞いているものです。こちらはいずれも認知度はあまり高くない状況でした。記載はしていませんが、これも市民の方に限定いたしますと、まず、ア)の憲法月間記念行事。こちらの認知度は19%、知っていた方の参加が17%。

次のページです。同じくイ)の夏季平和事業・平和の日イベント。こちらは認知度は24%、参加が35%。

ウ)の平和パネル展。こちら認知度が20%、最終ページに行ってくださいまして、参加が58%。

最後にエ)の青少年平和交流派遣事業につきましては、市民の方の認知度が28%、参加が48%となっております。ほぼ市民の方のほうが認知度、参加、ともに高い結果となっております。

今回、青少年平和交流派遣団の過去の参加者には、30名の方にアンケートをお送りしましたので、最後の質問を見ますと、16件参加している方がいらっしゃいましたので、約半分以上の方が回答してくださったと思っております。

長くなりましたが、中高生アンケートの集計結果については以上です。

○座長

どうもありがとうございます。何か質問のある方は挙手をお願いいたします。

○B委員

今回、私もこのアンケートを見て、一番最初にちょっとびっくりしたのが、住んでいるところが市外が多いというのがすごく驚いて、なんだろうと思ったら、プレイスの影響なんだなと思いました。そうすると、武蔵野市のことを中心に考えるといったときに、武蔵野市の中高生というのが捉え切れていないということになってしまうかなと思って、残念な感じがしました。これはイメージとしての感想です。

○座長

先日、事務局と打ち合わせしたときにも私もそれを指摘しまして、武蔵野の平和施策をこれから考えるときに、武蔵野の子どもたちの意見が欲しいので、市民はそのうちの何パーセントかというのを別にデータを添えていただきました。そうすると、確かに市民の中高生のほうがパーセンテージは高いというのが出てはいるんですが、もっと高く出るかなとも思っていて、私の予想よりはいま一つだったかなという気はいたしました。

ほかに質問、あるいは感想でも構いません。このアンケートも踏まえて次の議論に入りますので、このアンケートに関する何かご意見、ご質問ありましたらどうぞ。

○C委員

やっぱり回収率が10%を切っているというのは低いなということと、市のアンケートでもだんだんアンケートの回収率が下がっていると思うんですが、母数が全然違うので、母数210でこのアンケートをどういうふうに活用したらいいのかなというのはちょっと疑問があります。しかしながら、2,200人のうち、これを回答したということは、関心がある人が9.6%で、それ以外はそもそも関心がないんじゃないかなという感想です。

中身については、思ったとおりというか、能動的に何かやるというよりかは、受動的に学校で学ぶとか、用意されたものを受動的に勉強していくということが多かったのではないかなという感じがしました。

○座長

ほかにいかがでしょうか。

○D委員

最初に所要時間何分と書いていないと、思ったより長く感じてしまうので、所要時間5分とか書いてあると、電車の中でやろうとか思う人がいるかなというのは、感じたことです。

○事務局

1点、在学地を聞けばよかったですと思いました。確かに市外の方が多かったんですけども、武蔵野プレイスに来ている高校生の方で、おそらく武蔵野の高校だった方も一定数いたかなと思います。学校の種類は聞いたんですけども、在学地を聞かなかつたことが漏れていたと思っております。

○座長

武蔵野プレイスは、居住地も学校も武蔵野市外の中高生とかも結構来るものなんですか。

○E委員

いっぱいいます。

○B委員

ほぼほぼ武蔵野市じゃない。聖徳の子とかがすごく多いんです。近所なので、聖徳学園の子はわりと大勢います。

○C委員

大学生は千差万別というか、外大とかも使っていますし、ICUとかもすごいです。3階を使っているという感じですかね。

○座長

ほかにこのアンケートに関していかがでしょうか。

○F委員

感想ですけども、学習をしている分、武蔵野市の子どもたちはよく知っているという結果が出て、無駄になっていないというのは、これから学校でも学習を増やすというのが期待ができるのかなと思いました。学習効果がちゃんと出ているというのがいいと思いました。

○座長

ほかにいかがでしょうか。

それでは、もし何かありましたら、この後にご発言くださっても構いませんが、議題の

2つ目の「今後、本市で実施すべき取組み、方向性について」の意見交換をいたします。
まず、事務局のほうから資料の説明をお願いいたします。

○事務局

それでは、資料についてご説明させていただきます。

冒頭、座長からお話がありましたとおり、本日のメインテーマはこの後の意見交換ですので、その参考として、今までの懇談会での議論をまとめたものとして、資料3と4をお配りしております。

まず資料3をお願いいたします。1番、「平和」の定義についてです。第1回の懇談会で庁内検討会議のご報告を行った際にも少し触れましたが、今後の平和施策のあり方を考える上で、「平和」の定義と申しますか、懇談会で検討する範囲について考えることは重要であると考えております。

前回の議論で、広義の平和は、平和の問題を広く豊かに考えるという面では積極的な意味がある一方で、広く捉え過ぎると、市で行っているものは、福祉も含めて全て平和施策となってしまうので收拾がつかなくなってしまう恐れがあります。そのため、この懇談会で扱う「平和」としましては、「戦争関連」に加えて「国際理解・多文化共生」ではいかがかと座長から話があったかと思えます。

それに対して、絞ることは賛成ですということと、その一方で、ユネスコ憲章には「戦争は人の心の中で生まれるもの」という記載がありまして、その概念も加えて定めておきたいといった意見があったかと思えます。

事務局として、まず「平和」の定義と範囲につきまして、この両者を合わせた考えでいかということを確認ができればと思っております。

続きまして、2番、平和施策のあり方について考えるための視点です。

こちら、前回、座長のほうから2つの視点を挙げていただきました。1つ目の視点が武蔵野市の戦争に関するものと多文化共生・国際理解に関するものです。2つ目の視点が、子どもを対象とするものと大人を対象とするものです。この2つの視点を組み合わせて4つの象限をつくって、そこに分類して、前回、考えられる施策等についてブレストを行っていただきました。その内容をまとめたものが資料4です。

3番の今後の議論の進め方ですが、今申し上げた4つの象限それぞれについて、さらに議論を深めていただきまして、具体的な施策を挙げていく中で、提言と申しますか、報告の柱を決めていただければと思えます。

ただ、今回は懇談会ですので、必ずしも委員の皆様の意見を一本化する必要はございません。自由に意見を言っていただいて、そちらを報告に盛り込めればと思っております。先ほどの中高生アンケートの結果ですとか、また、資料3には、第1回、第2回の意見交換で出たキーワードも参考に記載していますので、こういったものを参考に、この後議論をいただければと思っております。

資料3の裏面をお願いいたします。最後に、4、報告書の骨子（案）です。まだ第3回ではあるんですけども、今回の懇談会、最終回が第5回となっていますので、今回を含めて残り3回の懇談会で意見をまとめていく必要があります。そのため、粗々ではありますけれども、今回、骨子案として提示をさせていただきました。このあたりにつきましてもご議論いただきまして、今回の議論を踏まえて、次回たたき台としてお示しできればと考えております。

事務局からは以上です。この後は座長に進行をお任せしますので、よろしく願いいたします。

○座長

それでは、ここからが本日のメインとなります。自由に意見を戦わせていけばいいのではないかと思います。本懇談会では、武蔵野市の今後の平和施策の方向性を示すということになるわけですが、その場合に、どこに話を絞るかということ一旦確定しておかなければ拡散するだろうと。そこで、先ほどの資料3の裏側の4番、報告書の骨子というところで、まず最初に、武蔵野市が掲げる「平和」とは何なのかというのが総論部分で挙げられてきます。これが先ほどの資料3の一番最初にあった、この懇談会では「平和」という言葉をどのように受け止めるかということと関連する部分になりますので、まずはこの点からもう少し意見を出してみてもいいのではないかと思います。

その上で、メインとなるのは報告書の骨子の中では2番の（2）です。今回、懇談会を設置して、平和に関して検討することの必要性。（3）上記を踏まえた市の現状と課題。この辺でいろいろこの懇談会で意見を出していけばいいと思います。

前回はブレインストーミングという形でホワイトボードに貼り付けるというやり方で、いろいろ発想を出してみようというふうにやりましたが、今日を含めてあと3回で懇談会としてのまとめを出すこととなりますので、少し具体的に、現実的に可能なものを挙げていったほうがいいのではないかと思います。

例えば、前回、VRを活用したらどうかということを行ったことは言ったんですが、お

もしろいアイデアだと思いますけれども、現実的にできるかどうかとなると、かなり難しいだろう。ということで、今日は現実的に武蔵野市が今後やれることという視点で考えていければどうかなと思います。

それで、前回もやった4つの象限で言いますと、戦争に関することと国際理解・多文化共生に関することという、この2つの視点でとりあえず挙げてみようと思しました。本懇談会の委員の中では、国際理解や多文化共生に携わる委員からは、既に様々な試みを具体的に把握なさっておりますし、また推進なさっておりますので、さらなる新たな提案が出していただけるのではないかと思います。

また、戦争の問題、あるいは非核平和の問題という、戦争の方向に関して、今まで様々な取り組みをなさっている委員からは、そういったご経験から具体的なアイデアを出していただけないだろうかと思います。そして、市の青少年平和交流派遣事業に参加された経験のある委員からは、または学生という視点で、今の中高生たちに何を訴えかけていけば中高生の心をつかむことができるか、小中高大学生といった生徒・学生たちが何を求めている、何をこちらが提供することができるだろうか、こういった視点から具体的なアイデアを出していただけないだろうかと考えております。

私は、具体的に他の委員の皆様のような取り組みを特に、何かに参加することはあっても、自分でつくったということもありませんので、むしろ具体的にご経験の豊富な他の委員の皆様方から意見をどんどん出していただきたいと考えております。

まず最初に、「平和」の概念という資料3の一番最初のところになりますが、ユネスコ憲章のことが確かに前回少し出ましたが、ユネスコ自体が第二次世界大戦の反省を踏まえてできているという背景のものでもありますので、ユネスコ憲章自体が戦争のない世界を教育や文化を通してどうつくるかという趣旨で生まれたものではありません。ユネスコがユネスコ憲章とともに始めた、提唱したのが、International Understanding Education。日本語にすると、国際理解教育。現在、国際理解教育という1つの領域分野がありますが、これは、言葉のもとをたどると、実はユネスコだったという流れがあります。

ですから、国際理解という言葉自体の中に戦争の問題は当然含まれておりますし、また、ユネスコ憲章の考えは、戦争というものが偏見や差別、他国や他文化に対する偏見、ここから生まれてきた。だから、そういった偏見を乗り越えるような心をつくることで戦争のない世界をという趣旨のものでもありますので、その意味では、(1)のところに書いてある戦争関連、国際理解・多文化共生、実はユネスコ憲章の精神は全部ここに含まれるの

で、したがって、戦争の問題と国際理解・多文化共生の問題、この2つの柱で考えても、十分ユネスコの精神や差別、偏見の問題は入るだろうと思います。

ですから、第1回懇談会のときにベン図が配付されていて、ここに平和、人権、異文化理解という3つの柱が立っていて、さらに、貧困、生活環境、生涯学習といった項目もあるんですが、このベン図で言うと、平和事業、狭義の平和と異文化理解、このあたりに焦点を当ててやったほうが、平和施策へ向けての懇談会の提案としては明確なものが出るのではないかなとは思いますが、いかがなものでしょうか。そういう方向で進めてよろしいでしょうか。

(異議なし)

○座長

では、「平和」の定義というところは、もちろん平和というものの自体が貧困とか福祉とか、そういったものも含む概念ではありますが、この懇談会としては、武蔵野の戦争の問題、武蔵野における国際理解・多文化共生の問題、そこに一旦焦点を当てて考えて、いろいろな提案が出せればいいのではないかと思いますので、では、そういう方向でしばらく議論をしていこうと思います。もちろん議論の過程でそれではまずいのではないかとということがあれば、またそのときに考えていけばいいのではないかと思いますので、とりあえずこの2つの視点でいってみようと思います。

そこで、どのようにこれをしていくかですが、前回はブレインストーミング風に思いついたものということでもよかったんですけども、今日あたりはある程度方向性をはっきりさせたほうがいいと思いますので、前回お示しした4つの象限それぞれで、武蔵野市で今後具体的に何ができるだろうかという意見を出していただければと思います。そうすると、資料4に1、2、3、4とありますので、この順番で、もちろん、ここに前回出てきた意見がずっと書いてありますので、これも踏まえながら、こういうことを具体的に提案できるのではないかというアイデアをお出しいただければと思います。

その議論に入る前に、もう一点ですが、先ほどのアンケートに関して3点ほど私の考えを話させていただきます。

まず第1に、事務局からも指摘がありましたように、ウクライナ問題とイスラエル問題の衝撃は予想どおり非常に大きかったなということで、戦争ということで今の戦争の問題が思いつくというのが多かった。おそらく3～4年前だったらここまでの数値は出なかったのではないかと思います。

特に昨年2月24日でしたか、2月の終わりにロシアによるウクライナ攻撃が始まったということでしたが、その1カ月後には学校は春休みに入るんですけども、春休みに入る前にかなりの学校でウクライナ問題に対する取り組みが行われておりました。これは昨年の3月に読売新聞がかなり精力的に学校取材して報道していましたが、例えば、小学校で児童会で戦争をやめようという宣言を出すとか、あるいは小中学校で児童会や生徒会で募金を集めて赤十字、あるいはウクライナ大使館にその寄附をするという試みが各地で行われていたようです。また、学校の授業でもウクライナ問題を取り上げるということをやった事例もNHKで放送されていたりしておりました。だから、わずか1カ月の間で、小中高校生、かなり衝撃が走っていたなというのは事実だったと思います。

それから、年が明けて、ウクライナの戦争もまだ収束の見通しもないようですが、それに加えてイスラエルの問題も起こった。実は、私の勤務先の大学を15年ぐらい前に卒業した学生で、ジャイカからパレスチナに派遣されていて、向こうでの現地の活動をずっとやっていたという卒業生がいるんですが、今は日本に戻ってきています。その彼女が先週、学内で講演会を、大学のイベントとしてやったわけですけども、200人以上の教室がほぼ満席に近い状態でした。それも、宣伝告知も10日ほど前にやったんですが、学生たちの反応が相当高かったなという感じでした。おそらく、小学生はともかく、中学生、高校生ぐらいだと、イスラエルの問題というのは衝撃だったのかなとは思いますが。

実はこのことを私も新聞から取材を受けたときにお話したのですけれども、このことが平和学習にとって、好機であるという言い方は不謹慎過ぎてやらなかったんですが、大切なきっかけになるというような意味のことを私は言ったんです。つまり、これだけ現在の戦争というものが、子どもたちどころか、大人も含めてリアリティをもって受け止められるということは非常に珍しいだろうと。だったらば、今まで、ある意味、日本は戦争がないという意味では平和な国、平和な社会でした。その日本において、戦争がここまでリアルに受け止められるようになったという今の状況を、平和の学習、戦争の学習へつなげていく、非常にいいきっかけになるだろう。それをうまく生かすかどうか、私の場合、取材は学校教育に関するところで受けましたので、それが学校の教師の役目ではないかということは申したんですが、おそらくこのことは、大人たちも含めて、平和施策の一つの方向性としても同じことが言えるのではないかとは思いますが。

つまり、武蔵野で過去に起こったこと、そしてウクライナやガザで今起きていること、もちろん背景も規模も全く違いますけれども、そこで生活していた人々の日常が一瞬にし

て破壊され、失われた。そして、武蔵野の場合は、戦争が終わってから日常を再び取り戻すことに成功した。だったらならば、そういう経験がガザ、あるいはウクライナの方たちとの将来を考える上で生かすことができるのではないか。例えば、今言ったような感じで、武蔵野の戦争の歴史と、現在の世界の戦争の問題をつなげることができないだろうか。アンケートを見てから感じたことの一つはそれです。

2つ目に、中高生たちは、先ほど事務局からも、参加型、体験型のものが非常に評判がいいというのがありました。これはたしか初回の際に私が少し言ったと思うんですけども、私の昔からの持論で、平和教育は楽しくなければいけない。楽しくなければ誰も平和のことなんか考えないだろう。これは私の個人的な持論にすぎないんですけども、アンケートを見ていると、もちろんふざけた意味の楽しさではなくて、平和を考える、戦争を考えるということは楽しいんだと思えるような仕掛け、これを大人たちがどうつくっていくのかというのは具体的に考えていいのではないだろうかとは思っています。

3つ目は、学校教育のインパクトというか効果、これはやはり否定はできないだろうなと思えます。それは、武蔵野市内の子どもたちのほうがパーセンテージが若干高かったというこの事実。統計の数が十分じゃないという問題は当然ありますが、ただ、武蔵野の学校教育が今まで試みてきていたことが決して無駄ではなかったということは言えるだろうと思えます。

私は学校教育が専門なので、学校の話ばかりになっているんですけども、特に公立の小中学校であれば、学習指導要領の枠の中で何ができるかということを考える必要はありますので、その辺は教育の専門家に任せるしかないだろうと思えますが、現在の指導要領の枠の中で武蔵野の学習をどのように進めることができるだろうか。例えば、小学校の社会科は、3年生、4年生、5年生は地域学習が基本ですし、特に小学校3年生は、市町村の学習ですから、武蔵野の学習を一番最初に丁寧に学校の授業で取り組むのは小学校3年生だろう。そうであれば、そのときに武蔵野の小中学生向けの副読本がありますけれども、例えば、その武蔵野戦争空襲版のようなものをつくることはどうだろうかとか、例えば、そんなこともあのアンケートを見ながら少し考えてみました。

ということで、今ここまで私の雑駁な感想を述べましたが、そこで、今の私の話にもし何か手がかりになるようなことがありましたら、それも踏まえて、とりわけアンケートの結果、それから、これまで武蔵野がやってきたこと、あるいは、やるべきだったが、まだやれていなかったこと、そういったことをそれぞれの委員のご専門やご関心の中から語

っていただければと思います。

そこで、手順としては、先ほどの4つの順番でいってみようかと思います。もちろん一通り出た後でまた全体に絡むものはご発言をいただいてもいいですし、また、1、2、3、4と分けていますが、これが厳密に分けられるというものでもなくて、例えば、1番と2番はつながる部分も当然ありますので、その辺はあまり厳密に分類をする必要はありませんが、とりあえず考える際の手がかりとしてこの順番でやっていこうかと思います。

そこで、まず1番目が武蔵野空襲の問題。それを学校では今後どういう取り組みが提案できるだろうかということについて、どうぞご意見を自由にご発言ください。

○A委員

座長の話が非常にまとまっていたので、どこから始めたらいいかと、今頭の中をぐるぐる回っている感じです。

一般的に言うと、戦争体験の継承。武蔵野の場合には空襲が中心にはなると思うんですけども、空襲だけではなくて、今、武蔵野市もほかの自治体もわりと体験集を出しているところが多いんですけども、きのう、おとといも、それを読んでも、生き残った人の記録ではあるんですね。亡くなった人は語るができないので、生き残った人の思いというのが伝わってくる。必ずと言っていいほど、戦争体験記録集の末尾はなんとつぶられているかということ、戦争は二度と起こしてほしくないというふうに書かれているので、やはり重みが違うかなと。

つまり、何が言いたいかということ、学校教育の中で戦争を学習するというのが、何年に日中戦争が始まりましたみたいなことを、私は社会科なので、そういうことを教えるんですけども、個人の側に引き寄せて、どういう体験であったのかということが大事にされなければいけないということは、体験集とかを読み直してみるところです。体験者でなければ語れないのは、まさに思いみたいな部分。その思いをぶつけても伝わらないだろうから、事実の中で体験を通じてその思いを伝えるというのが戦争体験を継承するという意味なのかなと私は思うんですね。それが今はなかなか難しくなっているということなんですけれども、何が言いたいかということ、戦争を学習することを大事にしたいんですけども、生きた個人個人の、1人1人の、また身近な存在である、武蔵野に暮らしていたとか、武蔵野の人が語る戦争体験というのは重みがあると思うんですね。その部分を継承するにはどうしたらいいかということをもっと考えたい。

資料4で出ているので言うと、例えば、それを何か別のものに表現するというのが、ガ

イドが必要だと思ふんですけれども、例えば、広島で被爆体験を絵にするという取り組みがありましたけれども、絵にするとか、何か表現するというものに出口が繋がっていくと、なお身近なものになるなと思います。そこだけ、パッと思ったところです。なので、報告書の中に「体験の継承」というキーワードが欲しいということです。

○座長

ほかにいかがでしょうか。

今、A委員がおっしゃった表現の方法の例としては、先ほど絵の例をA委員はおっしゃいましたが、これはたしか初回のときに私も言ったような気がしたんですけれども、広島市立基町高等学校が原爆被爆の体験者の話を聞いて、それを絵にするという、これは非常に有名なもので、学問的に言うと、社会学や哲学の分野でこれは相当絶賛というか、好意的に評価されているものですし、あと、映画というか、ドラマにもなっています。私もあれはすばらしい平和学習だなと思っています。

絵に描くというようなものだと、例えば、ピカソの『ゲルニカ』の日本版を書いてみようという、山梨の中学校か何かで、例えばそんな実践があったりというように、戦争の現実を、事実を、体験を聞いて、あるいは学んで、それを絵に描くというのは結構あります。

あと、音楽だと、これは広島の中学校です。『ねがい』というタイトルの歌を子どもたちがつくります。子どもたちがつくったのは詞でして、曲は広島音楽の専門家、プロの方がつくったんですが、1番から4番まで、広島の願いという歌をつくるんですね。これをネットで世界中に発信して、あなたの国の5番をつくってみようという呼びかけをするんです。つまり、世界各国の戦争だとか、あるいは苦しみのない自分たちの国をつくろうという試みで、例えば、シエラレオネからは、子ども兵から救出された方たちの願い、ベトナムだと、枯葉剤で被害を受けた大人の、生まれた子どももまた遺伝の問題が起こって、体が不自由だと。そういう子どもたちの願いというように、世界各地が受けた戦争の被害のない、戦争の被害を踏まえた願いを発信する。これが7～8年前に調べた時点で2000番を超えていました。例えば、こういう取り組みが広島の中学校から始まったという例があります。

それから、これは私の本にも入れましたが、武蔵野の公立小中学校で武蔵野空襲の体験を劇にするという試み。どうも今は行われていないようですが、10年ぐらい前までにそれが行われていたというのは、これはむしろ発信すべき非常にすばらしい実践だったのに、ちょっと残念だなという気はするんですが、例えばそういう試みもあります。

となると、美術、音楽、演劇、そして、「川田文子さんのこと」というあの例だと、漫画でもありますので、漫画も含めた文学によって表現するということですから、実は、実際に小中高校生がやる上でいくらでもそういう事例はあるので、武蔵野空襲を自分たちで表現するというのを、これは武蔵野の小中学生それぞれに合わせたものが何かまたできないかなという思いは、私は非常に強くあります。

ほかの委員の方いかがでしょうか。

○D委員

今のことに関連してですけれども、アートの領域で表現するというのは、学生視点からも非常に効果的だなと思っていて、学校教育だと、読書感想文とか、感想文を書かせることが多いと思うんですけれども、正直、私の周りにも、読書感想文はコピー・アンド・ペーストをしている人がたくさんいましたし、文章だと、似たような文、それっぽい文が書けてしまうので、アートの領域は真似ができないし、必然的に向き合う時間非常に長くなるという点が、表現とかをする上で効果的なのかなと感じました。

あと、平和施策のあり方の、平和施策を考えるに当たって、目標みたいなものがないと、終着点がわからないのかなと感じています。例えば、このアンケートの結果を受けて、中高生の回答率を50%を超すとか、そういう目標的なものを考えたほうがいいのかなどというのを感じたんですけれども、いかがでしょうかというところです。

最後に、先ほどジャイカの方が講演なさるのに告知が10日前だったとおっしゃっていたと思うんですけれども、学生的には10日前のほうがむしろ行きやすい。直前の告知のほうが予定がわかっていて、空いているから行こうみたいな気持ちになるので。逆に2カ月後とかのものを告知されても、正直忘れちゃうし、行けるかわからないし、みたいなどころがあるので、市が行うイベントとなると、10日前とかは無理だと思うんですけれども、逆に近いほうが行きやすいかなというのを感じました。

○A委員

今、目標ということD委員が言われたんですけれども、僕の中でも、考えていくときに、ディープな話になってくる部分と、なるべく広く告知するというか、知らせる、啓蒙みたいな意味というか、その両方のターゲットを持っていないといけないかなというのを僕は結構思っているつもりなんです。つまり、学校の教員はそれぞれの専門教科について、視野が狭くなりがちになってしまうんですけれども、それは僕もそうかもしれないですけれども、大衆性というか、誰でもが理解できるという気軽さみたいなものも必要だと思

ます。座長の言葉で「楽しくなければいけない」ということにつながるかもしれないけれども、いつでも目にできるという部分が欲しいなというのは1つです。

同時に、学校とか、重点を置いて、拠点があるといいと思います。ふるさと歴史館でもそうだし、学校も大事な拠点だと思うんですけども、コミュニティセンターとか、そういう拠点が発信するちょっとディープなもの。それは自分の足で向かって見に行けば見られるものと、広く市民に普及する部分と、その両方が僕は意識されなければならないのかなと思っています。

そういう意味で、目に見える、多くの人に広げるものは、それで僕はまちなか博物館とか、まちなかに掲示板があって、その掲示板に昔の武蔵野の姿がいつでも見られるといった意見を出しました。武蔵境の駅に、誰がつくったかわからないけれども、昔の境の駅の写真が出ていますけれども、ああいう形でもいいから、いつもの平和事業で使っているでかいパネルの写真がいつでも駅にあったら、それは嫌だと言う人もいるかもしれないけれども、こういう場所なんだと話題になるわけですね。ここに映っているのは市役所なんですなみたいな感じで。それを狙ったわけなんです。

○座長

広く多くの人に訴えかけるという部分と、深く知りたいという人のために情報や知識を提案できる部分という、D委員のおっしゃることとA委員のおっしゃることを合わせてみると、広い多くの人を対象にした目標と、より深く訴えかけるという目標と、確かに大きく2通りの方向性でいろいろ考えてみるほうが有効かなと思います。

武蔵境の駅に確かに昔の駅の写真があって、私は鉄道はあまり興味なかったんですが、あれはしばらく立って見ましたね。確かにあの写真は広く関心ない者にも訴えかけるという説得力がありました。

そういうアイデアをどんどん自由にご発言ください。

○C委員

このアンケートの中で、座長もおっしゃったように、楽しく学習するということを考えると、あと、戦争体験者の話を聞いたり、平和資料館に行くことが重要だと思うということを子どもたち自身が答えていることを見ると、ここであると、例えば、広島・長崎への修学旅行だとか、あるいは長崎への平和交流団の継続だとか拡充だとかということは、今後、子どもたちをキャッチするのにいいのかなと思います。

そもそも昭和の頃の平和問題懇談会でも、柔軟性の高い子どもたちに学習をさせること

が将来の気づきにつながるという提言があったはずで、それで海外の子どもたちの交流とか、国際交流協会の設立ということもその提言の中で実現したことでありますので、子どもたちを対象にするものというのは今後も重要視していくべきなのかなと思います。

ただ、ちょっと懸念するのは、アートの実現とか、学習とか、修学旅行の先とかということも学校にいろいろ私たちが考えついたことを提言したときに、どれだけそれを受け止め切るのかという心配はあって、今、教育委員会も学校現場が非常に忙しいということも聞いていますし、国際交流についても気持ちのある先生がいるところはやりますけれども、その先生の異動とともになくなるという現象が今までずっと続いてきているので、何かそれを制度的にやるとか、そういったことを学校側がどこまで受け止めてくれるのかなという心配はあります。

○座長

同じことを平和教育にも言えるんですよね。中心となる教員がいなくなったら、とたんになくなるというのは普通にありますね。そうすると、もし学校がやろうと思ったときにすぐ使えるものを用意するというところまでしかできないでしょうかね。例えば、カリキュラム上だと、先ほど小学校の社会科の例を出しましたが、小中を通して武蔵野のことをテーマにしたことを一番取り上げることができるのは、総合的な学習の時間になるでしょうが、そのときに、例えばこういう教材があるというのを、それこそ教育委員会のほうで用意して、それを学校に知らせておくというところまではできるだろうが、確かにその先は難しいかなと。

ただ、これはどの分野でも同じことが言えるのではないかなと思うんですが、幸いなのが、今、文部科学省も音頭取りしてやっているのが、SDGsを学校教育に取り入れようと。いわゆるESD (Education for Sustainable Development)。持続可能な発展のための教育というのが今の文部科学省が声高に言っていることでもあるので、その中の一つとして、自分たちの地域と戦争と平和というのを位置づけるのは、以前よりは学習指導要領上はむしろやりやすくなっているのではないかなということも期待はしたいんですが、ただ、それ以上にとんでもない多忙な状況に学校が置かれているので、その問題は文部科学省に考えてもらうしかないと思うんですが、もしやってみようというふうになったときに、その材料がなかったら、結局その先に進めない。だから、材料を提供するところまでは行政のほうで、市のほうでできるのではないかなと思います。

ほかにはいかがでしょうか。

では、2番のほうにいてみます。もちろん、言い漏らしたことがございましたら、最後に番号にこだわらず発言いただけます。

2番は、武蔵野空襲をどう継承していくかという大人向けの話ということですが、この中で一番急いで取り組まなければいけないのが、上から4つ目の遺品等保存のための専門的取り組みだと思います。この問題は、各地の平和博物館がどこも直面している問題で、年がたつにつれて、かつての戦争の遺品とかが劣化していくという状況の中で、どう保存するか。あるいは、例えば、戦争体験者がお亡くなりになったときに、その遺品を遺族の方が博物館に提供してくださる。それが相次いでくると、逆に保存ができなくなってしまうという問題に各地の平和博物館が直面しているという話も聞きます。

武蔵野の場合だと、延命寺に保管がされているということですが、ただ、専門的な方法で保管をしているのではないということなので、そうすると、ある意味、緊急に手を付けなければいけない分野はそこなのではないかとも思います。武蔵野市の場合だと、幸いふるさと歴史館がそういう専門学芸員もいらっしゃったりもするので、そういったところとかかわりをもって、遺品保存のための取り組み。これは待たなしでこの懇談会の提言案として出していいのではないかと思います。どういうふうに、何を、どのように保存するかというのは、これは専門的な知見がなければできないので、この懇談会ではそこまでは踏み込むことはできないでしょうが、これは抜かすことはできないだろうと。

この問題も含めて、それ以外のところではいかがでしょうか。

○B委員

今の歴史館を中心にした戦争資料の収集・保管のことについて一言だけ申し上げてもいいですか。延命寺さんに、ご住職が長年にわたって、これはある程度自分の使命みたいな形でずっと保存していただいている資料があるというのも承知しておりますし、それを活用させていただいて、様々な博物館、ふるさと歴史館としての展示等にも利用させていただいて、多くの市民の方にも資料提供という形でお伝えすることをやってきているところもあるので、当然、今後、先ほどの資料劣化の話もそうですし、所有者の方のご年齢のこととか、いろいろなことを考えると、資料が何かのときに散逸してしまうことがあると思うので、それに対して一定の歯止めを何とかかけるという意味で取り組みをしなければいけないというのは喫緊の課題だというのは十分承知をしています。

それと同時に、市内にそれ以外の様々な戦争関係の資料をお持ちの方、それこそ中島飛行機関係の方で、前、中島飛行機でお勤めになられていた方が引き継がれていた資料も、

実は探すと出てくる可能性がまだまだある。それをワンセットでいろいろな意味で武蔵野市において「もので語らせる」というのはすごく重要なことだと思うので、調査研究及び資料の収集保管、適切な保存、そして活用、そこまで含めて、今回の平和施策のあり方の中にメニューとして盛り込めるといいと私は強く思います。

○座長

全く私も同感です。それで、保存の場合、もちろん、どういうふうに保存するかという科学的な問題もあるわけですが、保存しているものをどのようにして展示をするか。つまり、知らせるかという問題も出てきます。これは、現在、いわゆるデジタルの発達の中で、アーカイブとしてそれをまとめたものをWEB上で公表するというのを、これは平和の問題に限らず、いろいろな博物館が相当取り組んでいるので、おそらくその辺は専門家の意見を求めれば、いろいろな方法が出るのではないかなとは思っています。

一般の市民の方たちがお持ちのものを何とか武蔵野空襲を後世に伝える上で集めるのも、ぜひ進めるべきだと思いますが、さっきも申しましたように、それで保存・保管が手一杯になるという問題もどうも起こるみたいなので、その辺を専門家の方たちのご意見をぜひ集めて、何とか工夫できたらなとは思っています。これはおそらく待たなしの状況ではないのかなと私は思っております。

ほかの委員の皆さんいかがでしょうか。

資料の項目で言うと、上から2つ目の体験の「伝承者」の、つまり、体験を伝える人をどう育てるかという問題。これは、1番の学校とも連携する話ではあるんですが、初回的时候会に申しましたが、これをわりと先駆的にやっているのは国立市のように。国立市では、戦争体験のない方たちが体験を伝えるにあたって、伝承者同士での学習会をかなりやっているみたいです。つまり、1人が個人的な思い込みとか、あるいは一面的な形で伝承するのは非常にまずいので、伝承者を目指す人たちでの相互学習会を重ねて、そのときには専門家の助言も受けながらやっている。例えばこういう例があったりするので、「新たな伝承者を育てる」というキャッチフレーズ的な言い方があるんですが、新たな伝承者、武蔵野空襲の新たな伝承者を育てるという試み、これは学校と連携をすることで、わりとできるのではないかと思います。

特に、A委員のように武蔵野空襲のことを研究している方、あるいはそういうグループがありますので、これは、国立市にできるなら武蔵野市だってできるのではないかと私は思っているんですけども。この試みも現実的には始められるのではないかとと思いますが、

もう既に何かやっているのであれば、私が知らないだけではあるんですが、これもどんどん進めていくべきかなと思います。

ほかにはいかがでしょうか。

○C委員

学校だけではなくて、コミセンというのが地域にあるんですけども、八幡町は中島飛行機があった関係で、八幡コミセンはそういうのが熱心な方が多いのではなかったかと思っています。写真展かなんかをよくやっていたりしゃった方もいたので、学校だけではなくて、地域のコミセンを核にして、そういうこともできるのかなと思います。

○座長

そうですね。武蔵野市に私が引っ越してきて驚いたのは、コミセンで何だと、最初わからなかったんですけども、それが各地にあって、しかも武蔵野市の広報を見ると、毎回何かやっていて、これは年を取ったらここで楽しく勉強できるかなと非常に楽しみにしているんですが、あのコミセンの試みというのはどこの市でもあるんですか。

○A委員

ないと思います。先ほどちらっと言った公民館というのは一般的にあるわけですけども、武蔵野は公民館がないですよ。コミセンの運営は市民が行っていて、どういうイベントをやるかというのは、集まった委員の方が決めると思います。八幡町も熱心な方がいらっしやると、それを取り組みとして行っていると思います。

あと、私たちが参加している非核都市宣言平和事業実行委員会は、貸し出しのミニミニ空襲展示みたいなものをつくっていて、市役所がかなり積極的に進めた結果として、11月に展示をやるコミセンが結構数がふえたみたいです。

○F委員

コミセンとしては、武蔵野市では16の協議会があって、館としては20あるんですけども、それぞれのコミュニティセンターが自主運営で、大きさも違うので、取り組んでいるものは違うんですね。ですけども、おっしゃるように、平和についてこの館で何かやりましょうというので一致すれば、市民も行政も一緒になって、自由に使えるというのはメリットだと思います。

そして、私は南町コミュニティセンターが近いんですけども、今はふるさと歴史館で展示したものを、ふるさと歴史館が終わったら、それを全部南町コミセンに持ってくるわけにはいかないんですけども、ピックアップしたもので継続的に歴史館のパネルの展示は

しています。なので、そのところは歴史館とご相談して、じゃ、今回は戦争に関するものでやりましょうという取り組みはできます。小さい館もあるので、同じようにはできないですけども、それは、いいほうにも悪いほうにもですけども、自主3原則の自主性というところがあります。そこは、すごく自由にできるという点ではいいと思います。子どもたちも、さっき座長がおっしゃったように、3年生ぐらいの生活の勉強で訪ねてきて、コミセンの中を見て、コミセンはどういうところかというのを学習することもやっています。

○事務局

少し補足させていただくと、コミュニティセンターは、F委員おっしゃられたように自主運営なので、ふるさと歴史館から出前もしていますし、あと、市としてミニミニ空襲パネル展という中島飛行機のパネルの小さめのものをつくって、それを貸し出しをして、今、コミュニティセンターが大体文化祭をやるシーズンなので、先日も桜堤コミュニティセンターとか西久保コミュニティセンターとか、大体壁1つ分ぐらいの感じで展示していただいています。そのほかに、今年回っていて、例えば、緑町とか八幡町は、ご自分たちでも写真を持っていらっしゃって、地域の方が撮っていた戦争時代とか戦前の写真を展示をされていて、そこにわりと若い世代が「あそこの角だ」みたいなことを言いながらアルバムをめくっていたりとかもあります。核家族化もしていて、なかなか古い写真を見る機会がないと、こういう取り組みもいいなと思いつつ、今年拝見してきたところです。

○座長

そうすると、各コミセンが持っているもののリストとか、あるいはこれまで試みたものの一覧表じゃないですけども、そういった情報を集めて、それを他のコミセンにアピールしたり、あるいは学校に示したりということであれば、わりと簡単に何かできるのではないですかね。コミセンという武蔵野市ならではのものがあるのであれば、ぜひそれも活用していけばいいんじゃないかと思います。特に、今、F委員がおっしゃったようなところであるならば、これはこの問題に関して活用しなければもったいないなという気もいたします。それこそ、子どもたちと大人たち、学校と大人たちを結びつける場としても多分機能するだろうと。

あといかがでしょうか。

○D委員

話はコミセンから変わるんですけども、大人を対象としたときに、スポーツと平和を

結びつけられたらいいかなと思いました。市報むさしのを見ていると、スポーツ欄のところにいろいろイベントを開催していると思うんですけども、そうところに募金の機会があってもいいと思います。武蔵野市のスポーツイベントに行ったことがないので、そういうのが現状あるかはわからないんですが、もしないのならそういう機会をふやしていったほうが、若い世代に平和について意識する機会ができるのかなと感じました。

まち歩きとか、ふるさと歴史館とか、いろいろあると思うんですけども、多分、20～30代はあまりいないのではないかなというのが所感でして、そうなると、若い世代にとっては仕事とかで忙しい休日に、まち歩きよりスポーツのほうがやりたい、行きたいと思うので、そういう機会に募金の機会を設けるとか、参加費の何パーセントを募金するとかで平和について意識をする機会をふやしたほうが、若い世代には響くのではないかなと感じました。

○座長

そういうアイデアもどんどん出してみてください。

○B委員

今のお話で、ちょっと乗っかっていいですか。D委員のおっしゃっているのはすごくポイントを押しているなと思うのは、少なくとも、例えば平和を考えると、戦争のことを意識するとかということから入り口で入ってきてというのは、間口がすごく狭いと思うんですね。だから、ある意味いろいろな人がアプローチする間口の広いところからたどって行って、ああ、こういうことも考えられるよねというのにたどり着くような仕掛けというのが、A委員が先ほどおっしゃられていたように、広い意味でつかまえていくみたいな部分がすごく必要なのかなという感じがしました。

スポーツというのはすごくいいツールだと思っていて、やっぱり楽しいじゃないですか。見るのも楽しいし、やるのも楽しいし。楽しくなくてスポーツをやる人はあまりいないと思うんですね。だから、楽しいところから入ったら、その中でこういったことが実は背景にあるんだよね、みたいなことがわりと親和性があるものなのかなというふうには思いました。

なんでそう思ったかということ、先だって、大規模な世界的な国際大会がある中で、試合の前に、今回、イスラエルで起きていることに対して黙とうをしましょうみたいなことが、セレモニー、それぞれの国の国歌が歌われる前に、みんなで1分間黙とうをすることが普通に行われるんですね。そういうのは、ただスポーツをファンとして見ているだけなんだ

けれども、こういったところでみんながリスペクトして、共感する、心を寄せるということをやるといふのを見るだけで、平和って大切なんだよなと思うことを強く僕は先だって意識したことがあったので、乗っかってお話をしてみました。

○A委員

既存のものであるかもしれないですが、楽しくという。入り口がいろいろあるのいいのではないかというのも賛成です。私は、フィールドワークで案内することが多いんですけども、先日、11月3日に久しぶりに、コロナが明けたしということで、去年もやっただけですけども、あまり告知しないでやって、今回は、幾つか結構影響力のある媒体に出したのもあって、人数は30人ぐらい集まりました。そのときに、これは2日前に思いついたんですけども、僕はよくしゃべっちゃうほうで、話が長くなって、聞くだけになってしまうという一番よくない感じになることがあります。そこで2日前にQ&Aをつくってクイズにしたんです。結果としては、またクイズの解説でよくしゃべってという声を仲間内からはいただいたんですが、今までよりはみんな、えー、あー、なるほどね、と耳をそばだてるといふか、答えを聞きたいみたいな感じになりました。多分子どもたちもQ&Aは結構好きだと思います。

例えば、三鷹駅の南口と北口はどちらが先にできましたかとか、そんな単純なものです。戦後史も入っています。だから、戦争だけではないんですけども、まち歩きとかにも有用かなと思います。

もう一言言っておくと、大人にしても、子どもにしても、先ほど座長がおっしゃったように、気軽に使えるものがあるというのはすごく重要で、例えば、学校だったら副教材ですけども、大人向けでもリーフレットとか、どのぐらい活用されるかわからないけれども、リーフとかパンフレットがいろいろあって、全部集めたいな、大体そういう仕掛けにするんですね。子ども向けだと、都立の公園の協会はスタンプラリーをやると何かもらえるみたいな形でやります。

だから、冊子的な、パンフ、リーフみたいなものと、スポーツじゃないけど、まち歩きとつながるみたいな仕掛けがあると、より参加が広がるのかなというアイデアです。

井の頭公園の中の北村西望の彫刻館があるんですけども、最近、学芸員さんがすごい熱心で、パンフレットをつくっているんです。ご存じですか。北村西望の漫画がちょっと入っていて、北村西望のパンフレットなんですけれども、ああいうのを見ると、すごく学びにもなって、パンフレットというのはいいかなと私は思います。

○座長

どうもありがとうございます。

では、続きまして、国際理解・多文化共生にかかわることについてみます。まず、学校を中心として何ができるだろうかという3番目の点はいかがでしょう。

○C委員

これはうちが日常的にやっていることですが、MIAでも外国人会員がたくさんいますので、その人たちに講座を開いてもらったりしています。あるいは、料理教室は人気がありますし、専門家もいますので、壁画のアーティストだとか、音楽だとか、洋画の先生だとか、そういった方を講師として様々な講座をやっています。これは小学生向けでもすごく人気がありますし、大人にも人気があります。

学校に留学生とか外国人市民を派遣して交流をする、多文化共生の理解を深めるというのは、この会の最初に多文化共生・交流課長が来て、多文化共生推進プランができたというのはご説明をしたと思うんですけども、あそこの中にも入ってしまっていて、今後はそれが非常に重要であるので、学校向けにMIAを使って外国人会員を派遣することを進めていこうということがそのプランには書かれているので、うちとしてはそれを受けて積極的にやりたいとは思っております。

学校だけではなくて、派遣につきましては、例えば、音楽家を老人会の集まりで演奏していただくとか、お料理教室をやっていただくという派遣にも応えていますので、そういう機会は今後も増やしていくつもりです。プランにも書かれていますので、交流の機会は増やしていきたいと思っています。

あと、外国人の方と一緒にボランティアとありますけれども、国際交流協会の場合、外国人は支援してもらう側というふうに皆さん捉えがちですが、講師としてやってくださったり、通訳もほとんど外国人の方が中心になっていますし、ボランティア、災害・防災フェアだとか、そんな形でも外国人の防災委員さんが一緒に出て、一緒に活動しているということも最近非常に増えているのかなと思います。今後も、会員が増えていますから、そういったことを充実させていこうかなと思っています。

小中学生に関しては、外国人の子どもたちを毎週の放課後、居場所機能もあるんですけども、宿題を見て、一緒に日本人の大学生のお姉さん、お兄さんと交流しようという試みもやっていますので、そういう身近なところの気づきだとか、小さな交流を持つところでは頻繁に機会を増やしていこうかなと思っています。

○座長

となると、今、3番、4番を両方説明していただきましたが、3番、4番に関して、国際理解・多文化共生に関しては、武蔵野市はかなり蓄積が進んでいるという理解でよろしいですか。

○C委員

そうですね。それと同時に、これは市がやっていることですがけれども、アメリカだとか、韓国だとか、昔はハバロフスク、ロシアだとかというところと子どもたちの相互交流をやっていますので、MIAだけではなくて、市が関与する交流というのはかなりの歴史がありますね。D委員もハバロフスクに行ったメンバーの1人ですね。

○D委員

あの体験はものすごく印象深く残っています。7年ぐらい前なんですけれども、今でもロシアの子と連絡も取っています。

○C委員

ロシアだとアムール川の支流で、川の水で料理したり、顔を洗ったり、皿を洗ったりという、まるっきり違う文化を子どもたち同士と一緒に体験するということは、ものすごいインパクトが強いと思います。トイレもすごいところでした。

○B委員

また乗っかっちゃうんですけれども、そういった意味で言うと、武蔵野市が中学生、高校生世代を対象に行っている交流プログラムは、市レベルで言うと相当珍しいぐらいやっているほうだと思います。少なくとも、今、韓国で2都市、忠州（チュンジュ）市とソウルの特別区の江東（カンドン）区と、アメリカのテキサス州ラボック市と、今は休止中ですが、ハバロフスク市とやっている。もう一つ、これから始めようとしているところが、ルーマニアのブラショフ市と、今、オンライン交流は既に始まっているんですけれども、リアルの交流を、これは大学生世代になるかもしれないですけれども、そういったところともやっていこうと考えています。

ただ、残念ながら、ルーマニアに関しては、今まさにウクライナの隣国ということもあって、こちら側から行くことがなかなか難しいので、来てもらうところをやろうと考えているということで、かなり力を入れて、青少年期、中学生、高校生の多感な、一番いろいろなものを吸収できるタイミングでプログラムを実施しているというのが武蔵野市の特長でしょうし、これは継続していく意味のある事業なのかなと自負しているところがございます。

ます。

何よりも子どもたちの変化がリアルに我々がわかるぐらいなので、多分本人たちはかなり強烈に変わっていると思うんですよね。そのぐらいの、他を知る、自分以外というものが何なのかということを知るいい機会になっている。まずはそこが平和というところを考える上で一番大切な違いを知るみたいなどころにつながってくると思うので、非常に大きな密接な関係にあるのではないかなと理解をしています。

○座長

とすると、懇談会からの提案としては、今までやっているものの蓄積を今後もさらに継続というのは当然なるんですが、さらにこういうことも追加したいみたいなものはないでしょうか。あるいは、このようにさらに改善したいというようなことはいかがでしょうか。

○C委員

海外との交流となると、市と国際交流協会だけではなくて、今でも吉祥寺のまち歩きに外国人の方に入っていて、英語を交えて案内をするみたいな試みが、あれはどこですかね。

○B委員

観光機構です。

○C委員

観光機構さんがやっていたりという実績もありますので。あとは、成蹊が今度海外の都市、ルーマニアの友好大学ですか、そういう交流をやると言っていますし、聖徳もオリンピックのときにいろいろなところと交流をしたりとやっていました。行政が絡まないといけない問題でもないのかなとは思いますが。

○B委員

おそらく行政がやるべきところは、多分きっかけみたいなどころが一番大事なところだと私たちは理解をしていて、行政の一番の特質は、市民の方からすると安心感。勝手に思っているだけかもしれないですけども、行政が取り組むプログラムというのは安心感があるので飛び込みやすい。それを入り口にして、自分たちが次にステップしていくところにつながるというところを提供しているのかなと思っています。なので、D委員もそうですけれども、参加してくださった方々が次に何か自分でチャレンジしようみたいなどころにつながるというのが何よりの成果だと思っています。それをなるべく応援できるような仕組みがちょっとまだ足りないのかなとは思っているんですけども。もうちょっとさら

に応援できるようなことができるといいかなとは思いますが。

○E委員

きっかけづくりというお話があったので、教育委員会で所管している生涯学習がまさにそうでした、学びのきっかけづくりをするということが目標となっています。先ほどからお話、アンケートでもありましたけれども、平和について関心が持てないというのは、きっかけがないということが原因というのが多かったんですけれども、行政で行えることは、きっかけづくりですので、今回も戦争を知るとか、多文化・国際理解を知るプラットフォームづくりということが必要なのかなと共通事項として考えていました。具体的には、話が戻ってしまいますけれども、戦争ですと、戦争を知るコンテンツとしては、戦争の文学とか、戦争の映画とか、あと、ゲルニカの話がありましたけれども、戦争に関するアート、絵画とか写真とか、もちろん音楽とかもありますし、平和像のような彫刻だとか、建築があったり、地域があったり、人があったりという、いろいろな知るきっかけというのはあると思います。本市にはいろいろな経験や知識、教養をお持ちの市民の方がいるので、戦争映画ならこれとか、よくインターネットではありますけれども、そういう推薦投票をするプラットフォームをつくって、今、アンケート機能をAIがいろいろな分野にまとめたりもできるので、市民のいろいろな方がおすすめしたものをAIでまとめて、そこで選ばれたものを事業化するというのも一つの手かなと思います。事業化するにはいろいろ、予算についてはクラウドファンディングを使ったり、投票してくれた方にはプレゼントを、平和祈念像のミニチュアをあげるとか、広島と長崎に研修旅行に行けるとか、いろいろな世代で行けるとなると、またおもしろい気づきがあるかなと思います。そういうきっかけづくりになるような、デジタルを使ったプラットフォームづくりができると、いろいろな市民の集合知が、武蔵野ならではの集合知がまとめられるのかなという期待がありまして、そんなことを考えていました。

○座長

ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

○A委員

私は3番とか4番に関してはあまり経験がないのですが、全然ないわけではなくて、三鷹の国際交流を通じて、指導部の方に学校に来てもらったという取り組みを10年ぐらい前にやったことがあります。そういう形で学校教育に結び、活用したという例はあるんですけども、多文化交流とか国際理解ということからちょっとずれてしまうけれども、私

が注目しているのは、これは行政がやることとはちょっと違うかもしれないけれども、きっかけというのはいろいろあったほうがいいということでは言えないんですけども、日本が持っている文化ということで言うと、アニメーションというのはものすごい強い発信力を持っているんです。でも、それは商業ベース的なことになってしまう可能性もあるので、どうこれを位置づけたらいいかわからないですけども、海外には随分日本のアニメーションに興味を持っている人がいて、聖地化する現象が起きて、今の子どもたちはアニメ文化というのはすごく強い影響力を持っているので、外国の人と、海外の人と結びついてくるきっかけとしても可能性はあるのかなと注目しています。どういうふうに、どこに進んでいってしまうかわからないところもあるので、難しさはあると思うんですけども、ちょっと何か考え、それを意図的に武蔵野から発信するようなものでもないで、でも、そういう可能性があるんだったら、新しいキャラクターをつくるとか、ミーハーな感じになってしまいますけれども、そういう可能性は視野の中に入れてもいいのではないかと思ったんです。本来の多文化理解というのはそうではなくて、相手のことを理解することだと思ってしまうんですけども、世の中の的には、日本が持っているアニメとかそういうものに外国人が関心を持つと、そこで接点が生じるというものも、テレビ番組でも、何しに日本に来たのみたいな、そういうものは非常に人気があるんですけども、そういう接点としては多様な接点があるのではないかと思います。

○C委員

共通言語にもなり得ますね。留学生はほとんど全員、きっかけはアニメなので。

○A委員

ちょっと話がずれますけれども、外国人の入院した生徒がお医者さんと仲よくなったのはアニメの話だったとか、そういうことは若い世代は強いですね。

○B委員

またアニメの話ですけども、今年、ようやくコロナ禍を明けて、青少年のリアル交流がやっと再会できたんですね。今年、韓国の忠州市に武蔵野市から子どもたちが行って、現地で交流する。アメリカのラボックの子どもたちが日本に来て交流する。江東区の子たちが武蔵野市に来るという形のやりとりがあったんですけども、特に韓国の子どもたちに関しては、日本語がしゃべれる子が何人もいます。何かと聞いたら、やっぱりアニメなんですよね。アニメとJ-POPというんですか。K-POPに対してJ-POP。逆もあって、日本の子どもたちも韓国語をしゃべれる子が何人もいますね。なんでと

聞いたら、K-POPが好き、ドラマが好き。韓国のアニメという子はいなかった。アニメは完全に日本のキラコンテンツになっていて、ものすごくよく見られているというのがわかりました。本当にひしひしと感じました。

またこれも個人的な体験ですけれども、フランスに行く機会がありまして、フランスに行ってテレビをつけたら、いきなり『シティハンター』という日本のアニメが日本語でやっているんですよ。フランス語の字幕がついている。あれを見てフランスの人たちは、日本語も入ってきながら、フランス語でも理解するというのをやっているのだから、多分普通につけて出るぐらいですから、きっと見ているんですよ。そんなのを見ていたら、街中を歩いていたら、いきなりアニメショップが目抜き通りにドカンとあって、中にあるアニメのキャラクターグッズを見たら、ほぼほぼ日本の製品みたいな感じで、日本というものがアニメを通じて理解されているんだろうなというのが伝わって、両方の側面から、今のA委員の話じゃないですけれども、すごく有効に、広めていくであったり、理解を深めるという意味で言うと、アニメというツールはすごく使えると思います。

皆さんご承知おきかもしれないですけれども、武蔵野市は実はアニメ・漫画に関してはある意味聖地と言われている場所で、非常に大きなアニメのスタジオが幾つもあって、先の東京オリンピックのときに、イメージアニメをつくったスタジオポノックさんは境南町に居を構えているとか、ありとあらゆるアニメスタジオもあるので、そういったところと協力してこういう物事を進めていくというのはありなのではないかと思います。アニメと漫画ですね。

○A委員

『進撃の巨人』とか。

○B委員

あと、スタジオディーンさんとか、いろいろなところがやっています。産業振興の視点で物語ってしまいましたが。

○座長

国際理解・多文化共生で日本人が海外の在住外国人の方を理解するというのはもちろんだけれども、その逆として、日本の文化を知ってもらうその一つの例として、アニメというのはなるほどなと思ったんですが、ジブリは武蔵野じゃないんですね。

○B委員

事務所機能は一部御殿山にありますけれども、ジブリは三鷹と小金井なんですね。小金

井にスタジオがあります。

○F委員

今の続きではないですけど、日曜日の環境フェスタでキン・シオタニさんがアドバイスをしながら子どもたちと作品作りをしていました。キン・シオタニさんには武蔵野市のコミュニティセンターのパンフレットをつくってもらっていますし、彼と平和のコラボができたら良いのではないかと思いました。

○座長

日本の文化の象徴的なものとしてアニメ、それを通じて、日本人と在住外国人の間の交流という、これは1つ大事なポイントかなと思いますが、日本の文化というか、武蔵野の文化というのは何かないですか。武蔵野にはこういう文化があるというもの。何かあればそれも使えるというか、むしろそれなんかも前面に出せるものがないかなと。

表の下のほうに武蔵野市にゆかりのある芸能人による YouTube というのがあるんですが、どなたか武蔵野市にゆかりのある、芸能人でなくても、アーティスト関係で、アニメーションの事務所があるのであれば、何かできないものでしょうかね。

○B委員

そういう意味で言うといっぱいいますね。人的資源は豊富だと思います。

○A委員

学校の行事で自分たちの好きなテーマを選んで校外学習をやる、グループ学習で行きたいところを自分たちで探してみたいにしてやったときには、アニメというと、大泉学園とか、西東京とか、わりとそれが引っかかって、武蔵野というキーワードでアニメというのがあまり。地元過ぎるのか、引っかからなかった。あそこに行ってみようみたいのはなかったんですよね。マイナスの話なんですけれども。

○座長

この懇談会で具体的な人名まで挙げる必要はないので、今の若い人たちに訴えかけるような文化の相互理解ですよね。文化の相互理解のためのツールを、新たなものを何か発掘したらどうかということは、そこまでは言えるでしょうね。

D委員は、例えば、若い人たちの間で受けるアーティストで、武蔵野市にいる人でご存じな人はいますか。

○D委員

アーティストでというのは、楳図かずおさんぐらいしかすぐには出てきません。

○座長

楳図さんがいらっしゃった。

○D委員

ほかには、アニメとは若干離れるんですけども、武蔵野市の学生向けのインターンシップが、可能かはわからないんですけども、そういうのができれば、むしろ日本に興味のある人が日本に来て、行政と一緒に考えて、そういうのに参加したら、むしろ自分の国と比べて、自分の国のいいところとかをこっちに還元してくれると思うので、それに準ずるものができれば、向こうからもというところもできるのではないかなというのは、今お話を聞いていて思いつきました。

○座長

そろそろ時間ですので、何かご発言ある委員の方はいらっしゃいますか。

それでは、そろそろエンディングに向かおうと思います。

今日のところは、後半の国際理解・多文化共生が既に先駆的なことがだいぶあるということだったので、新たなものがなかなか出にくかったかなと思いますが、今日出てきた意見、提案も含めて、次回以降でさらに煮詰めていくということになります。委員の皆様方には、次回までに、今日いろいろ出てきた話の中から、さらにこういうところは伸ばしていったらどうかとか、あるいは、これはおもしろいのではないかとか、あるいはこういうことも、今日では出なかったけれども、あるのではないかとといったことをお考えいただければいいのなど。つまり、本日の復習のような感じになりますか。また次回にはさらに具体化できるようなアイデアを出し合ってみたらどうかと思います。

本日の皆様方のご意見も事務局のほうでまとめさせていただくことになります。

それでは、その他の項目、よろしく願いいたします。

○事務局

それでは、最後に次回日程のご案内をさせていただきます。次回第4回懇談会ですが、来月12月26日の火曜日、午後6時から市役所の812会議室で開催いたします。お手元に開催通知もお配りしていますので、そちらをご確認いただければと思います。

事務局からは以上です。よろしく願いいたします。

○座長

では、委員の皆様、最後に何かご発言ある方はいらっしゃいますか。

それでは、第3回の平和施策のあり方懇談会をこれで閉会いたします。どうも皆様お疲

れさまでございました。

午後9時 閉会